

古文書を読もう

第35号

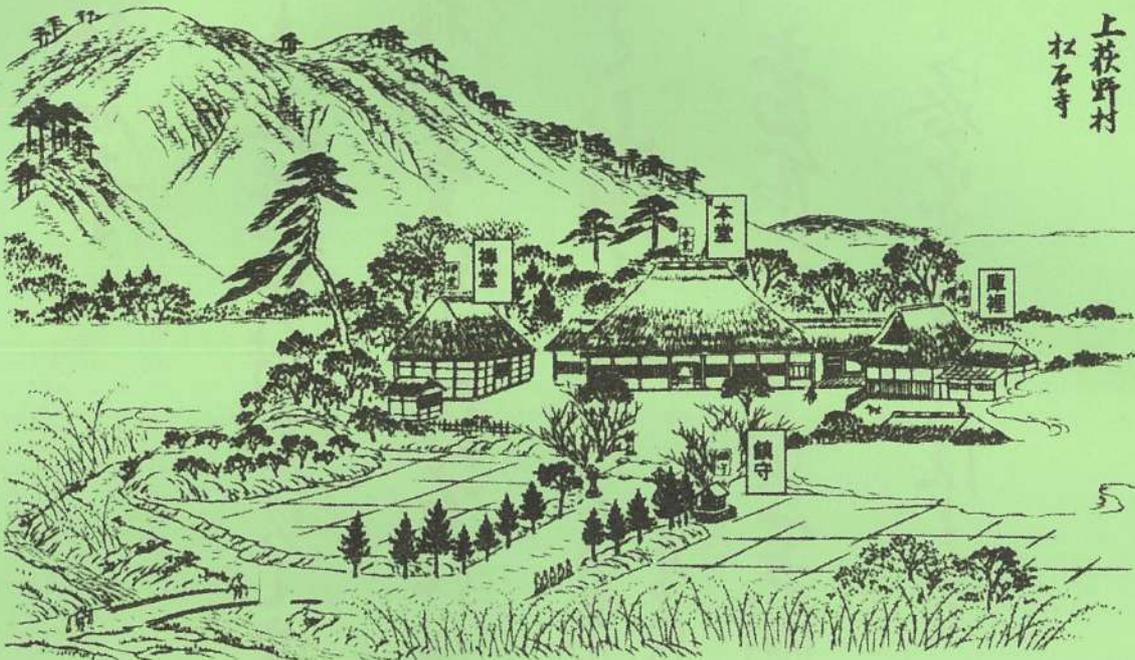
令和7年12月

古文書で知る郷土の歴史

古文書で知る郷土の歴史(十七)

『相中留恩記略』⑩

上荻野村
松石寺



絵図…国立公文書館所蔵版の絵図を加工

今回は上荻野村です。東は八菅村・棚沢村、西は煤ヶ谷村、南は飯山村・中荻野村、北は田代村・角田村に接しています。

絵図には歴史の古い松石寺が描かれています。寺伝によると大同年間(八〇六―八一〇)に真言宗開祖空海が当寺を建立し、華嚴山乗碩寺と名付けました。また空海は華嚴経全部を石に書き写し、絵図の左奥に描かれている西山の山頂に納めたともいわれています。その後林徳院と改称され、文明七年(一四七五)八月には、上州沼田龍華院(曹洞宗)の天巽が足柄上郡最乗寺の輪番を終え、上州への帰路当寺に身を寄せました。住僧白陽は天巽の教えを受け入れ宗派を曹洞宗に改宗し、寺号も旧の乗碩寺に戻しました。このことから天巽を開山、白陽を開基とされています。その後天正十九年(一五九一)徳川家康から御朱印を賜り、寺号も華嚴山松石寺と改めたといわれています。

松石寺には北条氏康・氏政・氏直に仕えた荻野の地頭松田康長一族の墓があります。承応二年(一六五三)松石寺鐘楼に本願施主として康長の子直長の名があること、寛文六年(一六六六)直長の子長重が松石寺に寺領を寄進したこと等々、松石寺と松田一族との関係の深さが『新編相模国風土記稿』に書かれています。

本堂裏には樹高二十メートルに達するスタジイの常緑広葉樹林が広がっています。樹齢はおよそ三百年で、内陸に残された貴重な自然林として神奈川県天然記念物に指定されています。

厚木市古文書解読会

あつぎ郷土博物館に収蔵されている古文書の解読に取り組んでいます。興味のある方は第2、第3、第4木曜日に活動していますのでお問い合わせください。

あつぎ郷土博物館 TEL 046-225-2515



旧暦と七十二候

古文書入門 (十七)

かなを読む (第二回)

旧暦には七十二候の季節があり、その一つ一つを表す言葉が生活の中に生きています。七十二候の季節を味わってみたいと思います。旧暦は明治五年(一八七二)に廃止され、翌一月一日から太陽暦(現在の暦)が採用される迄、江戸時代の人々に活用されており、太陽暦と太陰暦を組み合わせた暦です。四季の他に、二十四等分した二十四節気と七十二等分した七十二候があります。

二十四節気は立春から始まり冬の大雪で一年となります。これらは現在一般に使われている暦に記載があり、季節の節目を感じる身近な言葉となっています。また農事や俳諧歳時記の季語を決める基準など、生活文化と関りがあります。

一方、現在の暦ではほとんど目にする事がなくなつたのが七十二候です。二十四節気の一つの節気を三分割したもので、事象や動植物の変化や移り変わりを表現する短文で書かれています。いくつか挙げてみましょう。

○「玄鳥去」燕が南方へ去っていく頃(九月中旬頃) ○「熊蟄穴」熊が寒さを避けて冬眠する頃(十二月中旬頃) ○「鶏始乳」鶏が始めて卵を産み始める頃(二月下旬頃) これらの短文はその時代に生きた人々が、自然の細かな変化を感じ表現した言葉で、日々の暮らしと密接に繋がっていました。現在の環境の違いこそあれ、ここに表現された短文からは、四季豊かな日本の自然をより一層感じることが出来ます。書かれています情景を感じながら七十二候を楽しむのはいかがでしょう。(三重)

前回は看板のかな文字を読みました。今回は、ほとんどかな文字で書かれる黄表紙の『御詠染長寿小紋』(山東京伝)の文章を読んでみましょう。

① 余のくまるといふはなす
② 命のくまるといふはなす
③ 命のくまるといふはなす
④ 命のくまるといふはなす
⑤ 命のくまるといふはなす
⑥ 命のくまるといふはなす

この文で使われている漢字は①だけで、それ以外はすべてかな文字です。①は人が特徴的で『命』です。

この下の部分も、とてもよく似ているくずし字『命』があります。これは「印」で、よく出てきます。ひらがなを読むときに難しいのは、現在のひらがなの字母以外の字母を使った変体があることです。ここでは②③⑤です。三回書かれています。②は字母が「春」で「す」と読み「春」と崩されます。③は「王」で「わ」と読み「王」と崩されます。⑤は「本」と読み「本」と崩され、⑥は「奈」と読み「な」と崩されます。

また、現在のひらがなと字母は同じですが崩し方が異なる変体があります。④と⑥です。④は「川」で「川」と崩され、⑥は「奈」で「奈」と崩されます。

これで読めるようになったでしょうか。全文を読むと「命のく春」といふハ王ら川てくら春本どのく春りハ奈し」となります(このように書かれている通りに書き写したものを解説文と言います)。これを現代の日本語の読み方に直すと、「命の薬」といふは、笑って暮らすほどの薬はなし」となります(これを読み下し文と言います)。それでは次の文を読んでみましょう。分らない字は、『くずし字用例辞典』などの「かな」の箇所を見て探してみましよう。

よめの中へ入るるあまの
とりのらるる二をなるとふ

解説文は「よ能の中へ入るるあまのをいのちから二人んめといふ」、読み下し文は「世の中に大切なものを命から二番目という」です。

古文書を読む 第11巻3号通巻35号

発行日 令和7年12月11日
発行所 厚木市
編集 厚木市古文書解説会
住所 厚木市下川入一三六六一四
電話 〇四六一二二五―二二五